（論文）

「中ノ鳥島」の探検者・大平三次の伝記のための覚書
――自由民権活動家から投機的実業化へ――

長谷川亮一[1]

はじめに

1913年11月15日、平尾幸太郎という大阪の実業家の派遣した帆船「吉岡丸」が東京を出帆した。この船は、1908年8月に東京府小笠原島庁に編入された「中ノ鳥島」、別名「ガンジス島」（Ganges Island）を探索し、その島の開拓を試みようとしたもので、20数名が乗り込んでいた[2]。「中ノ鳥島」は1908年に山田禎三郎（1871-1930）という人物が、前年夏に「発見」したと主張し、その報告をもとに日本領に編入されたものである。ところが、吉岡丸はついにそれらしき島を発見することができず、翌1914年3月30日、何の成果も無きまま東京に帰航した。

中ノ鳥島はその後の再三にわたる調査でも発見されず、1946年には海図から削除されている。おそらく発見報告自体が何らかの理由による捏造と考えられる。

ところで、この吉岡丸には、「監督」として大平三次なる人物が乗り込んでいた。

当時の新聞に報じられた平尾幸太郎の談話によれば、「私の代表者たる大平三治[ママ]は実に日本人としては初めて南米ブラジルへ渡航した男で当年六十八九といふ老人だが壮者も及ばない元気である」[3]という。後述するように「日本人としては初めて」というのは事実ではないが、初期の移住者の一人であったことは事実である。また「南米ブラジルに於て商業を営める三重県人大平三次氏（六十七歳）」[4]などと報じた記事もある。1913年当時数え年67歳であったとすると、逆算すれば弘化4年（1847）の生まれということになる。吉岡丸においてはスポークスマン的役割をになっていたらしく、新聞向けにしばしば報告を行っている[5]。

筆者がこの人物に興味を抱いたのは、拙著『地図から消えた島々』執筆のために新聞記事を調査していた際のことであった。それほどの重要人物であるとは思われなかったものの、三重県人でブラジル渡航経験がある、という乏しいヒントをもとに史料探索を進めていったところ、予想外の事実に出くわした。この大平三次（しばしば「参次」と表記される）なる人物は、壮年期に自由民権運動に関与し、また東京で新聞業や売薬業を営んだこともあり、人脈的には岸田吟香（ぎんこう）や土居光華（こうか）、黒岩涙香（るいこう）といった錚々たるジャーナリストとのつながりを持っていたことが確認できるのである。

本稿は、この多彩な経歴を持ちながらも歴史の影に埋もれた人物の生涯について、諸々の文献に断片的に見える記述などをもとに、若干の整理を試みたものである。とはいえ、現時点では史料調査はいまだ不十分であり、生没年の確定すらできていない。本来ならまだ論文としてまとめる段階とはいえないのだが、今後の研究準備のための中間報告として、ひとまず取りまとめることにしたい。

I.　前期――東京時代

1.　自由民権運動とジャーナリズムへの参加――『東京さきがけ』『東京新聞』『嚶鳴雑誌』

大平の出身地は信濃国伊那郡飯田（明治以後下伊那郡、現在の長野県飯田市）である[6]。生年は先述の通り弘化4年（1847）頃と思われるが、確証はない。初期の経歴については三谷敏一〔編〕『神都名家集』（1901年）所収の「大平参次氏之伝」[7]がほとんど唯一の文献であるが、それによれば、幼名を善治郎といい、のち三次と改めたという。また、6歳のときに父を失っている。なお、後述するように、大平は後年「東京府平民」を称していることから、武士の家系ではなかったものと考えられる。

長じて平田篤胤門下の国学者・岩崎長世（1807-79）の門下生となった[8]。岩崎は嘉永5年（1852）から文久3年（1863）まで飯田に滞在し、多くの弟子を育てている[9]。幕末維新期の大平については、『神都名家集』に「憤然として決するところあり素志を慣徹するの機洵（まこと）に此秋（このとき）にあり起（たち）て群勇の間に交遊す」[10]とあるが、具体的に何をしていたかは明らかでない。

1874年1月17日、板垣退助・後藤象二郎・副島種臣・江藤新平らは左院に民撰議院設立建白書を提出した。このとき大平は「大に之（こ）れに賛同し幸福安全社を銀座街に開きて専ら之（これ）に従事」[11]したとされる。

『自由党史』（1910年）によれば、幸福安全社とは「同志集会の場」として「京橋区銀座三丁目」に設置された「倶楽部」であり、「福井県人蒔田魯」が管理していたという[12]。設置されたのは愛国公党創立（1874年1月12日）の直前とあるだけで、正確な時期は不明である。また同書によれば、1875年7月5日には地方官会議傍聴者集会が幸福安全社で開催されたという[13]。なお、田村直臣が、1876年4月4日に第一長老教会から独立して日本独立長老協会銀座教会を創立した際、幸福安全社の階上広場を利用したという[14]。ただし、大平三次との具体的な関係は不明である。

元『東京日日新聞』主筆の岸田吟香（ぎんこう）（1833-1905）は、1877年5月1日に『東京さきがけ』を創刊したが、この際、大平も関与している[15]。『東京さきがけ』は1878年12月に『東京新聞』と改題、1880年3月に廃刊となった[16]。1879年6月刊行の山田享次〔編〕『米国前大統領哥蘭的（グラント）公伝』（学農社）の奥付には、「印刷発兌（はつだ）　銀座一丁目廿一番地　東京新聞社　大平三次」とある[17]。

また、大平は東京の民権結社で、立憲改進党の前身団体の一つとして知られる嚶鳴（おうめい）社の初期の社員[18]でもあり、1879年10月5日に創刊された同社の機関誌『嚶鳴雑誌』には、社員として署名している[19]。署名は翌1880年5月12日発行の第14号まで続けられており、当時の住所は「京橋区銀座一丁目廿一番地東京府平民」となっていた[20]。

1880年5月に長野県の民権結社・奨匡社の松沢求策（1855-87）と上条蟻司（かみじょうありじ）（1860-1916）が、国会開設請願のため上京した際には、大平が自ら発起人となって6月11日に激励会を開いている。このときの会合には淡路出身の民権家でジャーナリストの土居光華

（1847-1918）も来会しており、土居とはこの時期から親交があったようである[21]。なお、土居の娘・富士は、のちに大平三次の息子・善太郎に嫁いでいる[22]。同年8月に作成された奨匡社の社員名簿には、大平も東京府在住の社員として名を連ねている[23]。

ちなみに、松沢は民権有働のかたわら南島開拓にも関心を持っており、八丈島の開発事業や、また玉置（たまおき）半右衛門（1838-1910）の鳥島開拓事業に参加したことが知られている[24]。大平にその面でも何らかの影響を与えたのではないか、と疑われるところであるが、裏付けとなる史料はいまのところ見出せていない。

2.　売薬業への転身と破産

『東京新聞』廃刊の少し前から、大平は「キンドル散」という小児薬の販売業を始めている。「キンドル散」は Kinder-Puwder 、つまりドイツ語で「小児用パウダー」である。

1879年9月27日付『読売新聞』にキンドル散の広告が見えるので、この頃にはすでに商売を始めていたらしい。この広告には、「此の薬は西洋大医の遺方にして岸田吟行翁の伝法なれば専ら小ども[ママ]の病根を絶ち健全に成長せしむるの良薬ゆゑ用ひて其効能の著しきを知り給べし」とある[25]。

［図1］『読売新聞』1879年9月27日付広告

岸田は新聞記者業のかたわら「精錡水」なる目薬の製造・販売を営んでおり、のちには完全に売薬業に転じている。大平もその縁でキンドル散の販売を始めたものと見られる。

大平は、歌舞伎劇場の新富座に引幕を贈ったり[26]、1880年11月には南伝馬町に諸売薬大取次所「大平堂」を開店したりしている[27]。また、1882年3月12日付『東京絵入新聞』には「大日円」なる薬（何の薬なのか不明）を1月11日に発売した、という広告が掲載されているという[28]。しかし1882年11月、大平は借金の返済に窮して債権者から訴えられ、東京始審裁判所で「身代限り」（破産）の宣告を受けてしまう[29]。

民権活動家で講談師の伊藤痴遊（仁太郎、1867-1938）は、晩年の回想において、1884年12月に起こった飯田事件（村松愛蔵・川澄徳次ら三河の士族民権家グループが、政府転覆を画策したとして検挙された事件）について、「飯田事件には、村松愛蔵、八木重治、川澄徳次、桜井平吉、大平三次、翠川鉄三等の人々が、引つかゝつて居た。尤も、桜井、大平、翠川は、信州の人である」と書いている[30]。しかし、このとき実際に検挙されたのは大平紀綱（松本出身の弁護士）であり、痴遊は紀綱と三次を同姓であるために取り違えたものと思われる。川澄徳次（1859-1911）もまた、のちにミクロネシア交易や南洋探険に従事することになるので[31]、大平三次とも何らかの縁があったのではないかと想定したくなるのではあるが、その点は確認できない。

また、1884年から85年にかけて、「大平三次」という人物が、『五大洲中 海底旅行　上編』（四通社、1884年10月）、『徳川中興 明君言行録』（内外書院、1884年12月）、『五大洲中 海底旅行　下編』（起業館、1885年3月）の三冊を立て続けに刊行している。このうち『海底旅行』はジュール・ヴェルヌの『海底二万里（リュー）』の翻訳（英語からの重訳）[32]である。この大平は、四通社社長・服部撫松（ぶしょう）（誠一、1841-1908）による『海底旅行　上編』の「序」に「社員大平氏」とあり[33]、また奥付で「東京府平民」となっているほか、経歴等は不明である。これが本稿で述べる大平三次と同一人物なのか、同姓同名の別人なのかは、いまのところ確認できていない。

3.　再度の新聞発行――『輿論日報』『日本たいむす』

1885年4月25日、大平は弁護士の八幡儀三郎らとともに『輿論日報』（京文社）という新聞を創刊した[34]。この新聞については、土居光華の紹介で入社した曽我部一紅（俊治、1864-1923）の回想[35]に詳しいが、それによれば、各新聞の社説の載っているゲラ刷を真夜中に集めて印刷し、午前中に配達するという代物であり、「各社の社説が一枚で分り、しかも其日の中に見られ、価も一枚一銭という廉価で、頗る時好に適した処から、大に世人の歓迎を受け紙数も一万部以上となり夕方までも印刷せねば間に合わぬ様になつた」[36]。もっとも、いくら著作権の概念が弱い時代とはいえ、これは当然ながら他紙の顰蹙を買い、1885年5月23日付内務省達甲第17号で「新聞紙ニシテ他ノ新聞紙（欧文新聞ヲ除ク）ニ掲載ニスル論説ヲ十日以内ニ其新聞紙ニ転載スルトキハ必ス原新聞紙ノ持主又ハ社主ノ承諾ヲ要セシメ候」と規定された[37]。このため、同紙はそれまでの体裁を改めざるを得なくなり、8月25日に一般紙『日本たいむす』に改組されている（現存する英語紙『ジャパン・タイ

ムズ』 *The Japan Times* とは無関係)。このとき主筆に迎えられたのが、元『同盟改進新聞』主筆で曾我部とは旧知だった黒岩周六、すなわち、のちの『萬朝報』主筆・黒岩涙香（1862-1920）その人である[38]。もっとも、この時点ではまだ「涙香」の号は名乗っていない。

大平はこの新聞で広告取次業を試みたとされる。すなわち、「某［大平］は日夕商工業者を訪問して、貴家に必要あるべき広告を、我が紙上に掲ぐべければ、幾何円を貸与へずやなど、利益交換問題を以て、奔走誘導する所あり」[39]という。

しかし、同紙は10月5日から11月10日まで、「治安妨害」を理由とする発行停止処分を受ける[40]。詳細な経緯は不明である。処分解除後は、黒岩周六の提案で、1頁目に七福神を描き、手書きで筆彩色を施して出版する、というような奇抜な趣向を試みたりもしたが、結局、発行停止のダメージが祟り、12月9日をもって廃刊となってしまった[41]。以後、大平は新聞事業から手を引くことになる。いっぽう、黒岩はその後、『絵入自由新聞』『都新聞』などの主筆を転々としたのち、1892年に自ら『萬朝報』を発刊することになる。

1886年にコレラが流行した際、大平も罹患したものの、無事恢復している。このとき、上野池之端の薬店「守田宝丹」の主人、守田長禄（治兵衛、1841-1912）から「参次将軍虎列刺魔王撲滅の図」を送られたという[42]。

4.　「スパーラ・ラスラ」の興行

1887年5月、大平三次は東京の築地木挽町で「スパーラ・ラスラ」なるものの興行を行った[43]。「スパーラー」はスパーリングをする人、すなわちボクサーのこと[44]、また「ラスラ」は「レスラー」で、これは、日本初のボクシングおよびプロレスの興行といわれている。この興行は、元力士で、渡米してプロレスラーとなり、その後マネージャーに転じていた浜田庄吉という人物が、日本でもボクシングとレスリングの興行を行おうとして、アメリカから十数名のレスラーとボクサーを連れてきて企画したものであった。

この興行は5月5日から10日間の予定で開催されたが[45]、内外人の格闘ということが問題とされ、12日に興行中止命令を受けてしまう[46]。また、興行の内容自体も、当時は観客がボクシングやレスリングのルールになじみが無く、不評であったらしい。当時、実際に興行を見たという山本笑月（松之助、1873-1937）は、後年の回想で、「第一、声援したくも名は知らず、そのうえ一勝負に二、三十分もかかるので好い加減くさくさ、気の短い東京ッ子には不評判で、私の見た目も桟敷はガラガラ、幾日も打たずに引き揚げた」[47]と記している。『団々珍聞（まるまるちんぶん）』1889年1月7日号では、「碧眼ノ水夫間ニ合セ者。拳闘組打（スパーラ）吾人（ラスラ）ヲ欺ス」と揶揄されている[48]。

この興行の失敗がもとで、大平は東京を去ることになる[49]。一方、浜田は、大相撲とのコネを利用して西日本で興行を続けたが、不評は挽回できなかったようである[50]。

余談ながら、1944年に発表された富田常雄（1904-67）の小説『続・姿三四郎』の中に、主人公の柔道家・姿三四郎が、ウィリアム・リスターというアメリカ人の「スパアラの選

手」と対決する場面がある[51]。この場面は、おそらく石井研堂『明治事物起源』にある「スパーラ・ラスラ」興行の記述を下敷きにしたものであろう。

II.　後期――三重県・ブラジル時代

1.　宮川運河開削事業と宮川分水計画

土居光華は、芳川顕正の勧めで、1887年3月から1888年10月まで、三重県飯高・飯野・多気三郡の郡長をつとめている[52]。東京を去ったのち、大平が三重県に移り住んだのは、この縁によるものであったらしい。

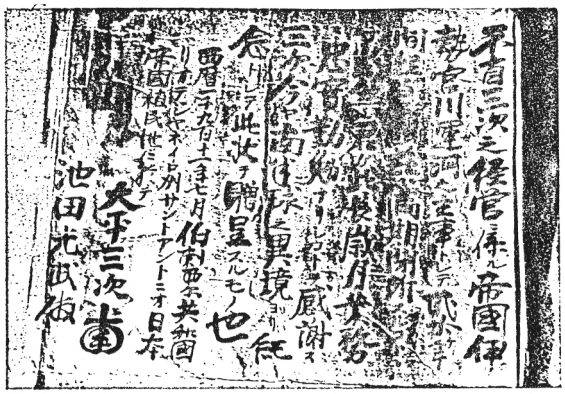
この三重県の地で、大平は「宮川運河」の開鑿事業に着手する。宮川上流の大杉谷および大台ヶ原山は豊富な森林で知られるが、宮川の上流部が急流のため、木材の運搬に川を用いることができなかった。この川の流れをゆるやかなものに変えて、筏や小舟を通すことができるようにする、というのがこの事業の目的であった[53]。この事業は三重県令石井邦猷（くにみち）（在任1885-88）の勧め[54]とも、また第一銀行四日市支店長八巻道成の勧め[55]によるものともいわれる。開鑿工事は1889年に着手され、翌1890年に完成した[56]。

この運河は「宮川全川に於て「木材下河出願」をその筋に出し、木材の川流しを行い、当時の宇治山田町取扱所で木材を評価し料金徴収を行」う、というシステムであったという[57]。運河の通河銭は実価格の7～12%を徴収し、また、丸太の運河通行本数は、1890年から1894年までの5年間におよそ50万本を超える[58]。大平の一連の事業の中では、この事業は最も成功したものと評価できる。

さらに1893年、大平は、宮川を分流し伊勢山田の中央を通す灌漑水路計画を発案し、関係町村において障害がなければ、実測の上で設計方法を調査する、と度会郡役所に申し出た。これによって右岸5000町歩の耕地を灌漑する、という計画であったという。大平は関係町村の許可を得て実測に着手したものの、立ち消えになっている[59]。

この時期の大平について、1895年に発行された『勢伊志紀 顔見立評判記』は「その経歴を聞けば、種々雑多、豪胆にて断行に敏なり、いはゞ勇み肌のきかね気もの、なか／＼仕入ものならず、別誹（あつ）らへの人物ぞ、たゝ惜むらくは、特に経営の衝に当り、或は欠く可らざる情誼を放擲し、之れが為なそ品位を失墜せしむることあるの一事なり」[60]、1901年に発行された『神都名家集』は、「剛放卓犖にして敢為の気性を有し細故を顧ずして好く大功を収むる者」と評している[61]。

宮川運河事業は1911年7月をもって満期閉所となった[62]。



明治44年（1911）宮川運河資料
（大字明豆　諸戸林産株式会社蔵）

［図 2］『宮川村史』437 頁。「大平三次」の自署が見える。

2.　大平善太郎のブラジル渡航と日伯商会

大平三次の息子・善太郎は、農商務省派遣海外練習生として、1905 年にブラジルに渡り、リオデジャネイロ州ペトロポリスの日本公使館に下宿した[63]。三重県人として最初の渡伯だったといわれている[64]。同年 10 月、善太郎は「南米伯剌西爾国貿易事情」を報告[65]している。

1906 年 9 月に藤崎三郎助（四代目、1868-1926）サンパウロで初の日系商店である「藤崎商会」が開店すると、善太郎は自らも日本雑貨販売店の経営を考え、12 月に帰国した。翌 1907 年 8 月、父・三次の援助を受けた善太郎は、猿橋伝と豊島昌を伴って再びブラジルに戻り、9 月 25 日、リオデジャネイロで「日伯商会」を開店した。これがリオデジャネイロ最初の日系商店である。もっとも、開店当初は物珍しさもあってかなりの人気を誇ったものの、商品がまたたくまに底をつき、その補充に失敗したりなどしたため、数ヶ月のうちに行き詰まることになってしまったという[66]。

この経営危機に際して、大平三次本人が 1909 年に杉原繁太郎・蜂谷吾輔らを伴ってブラジル乗り込んでくる[67]。なお、三次はブラジルでの商業にあたって、土居光華からのアドヴァイスを受けたという[68]。この間の 1908 年、水野龍（りょう）（1859-1951）の皇国移民合資会社が、日本初のブラジル移民船「笠戸丸」を派遣している。

外務省通商局の『海外日本実業者之調査』の 1907 年 12 月末日現在の版には、リオデジャネイロ市の項に「日本雑貨輸入販売」を営む「日伯商会」が記載されている[69]。1908 年版では業務内容は「日本雑貨輸入及家具製造販売」とあり[70]、1909 年版には記載がないが、1911 年版には「大平商店」の名で記載され[71]、以後の版では消えている。また大平善太郎は、1908 年 1 月に『農商務省商工彙報』に「伯剌西爾国ニ於ケル本邦商品ノ状況」を報告している[72]。

3.　サント・アントニオ耕地の開拓

1909年12月3日、大平三次はラファエル・モンテイロ（Raphael Monteiro）というブラジル人と手を組んで、リオデジャネイロ州政府との間に日本人植民誘入契約を結んだ。これは、州政府が無償提供するマカエー郡（Macaé）のサント・アントニオ（Santo Antônio）耕地（約1500町歩）に日本人を入植させようとする計画であった[73]。

モンテイロは、これより以前の1907年11月1日、皇国移民合資会社社長の水野龍と共同で、やはりリオ州政府との間にほぼ同内容の植民契約を結んでいる[74]。このときはサント・アントニオ耕地だけでなく、他にもいくつかの植民地を無償提供するという内容であった。この契約によって隈部三郎（1865-1926）らがサント・アントニオ耕地に入植しているが、肝心の入植計画のほうは、モンテイロ＝水野側で契約履行の準備が整わず、また、州政府の内部抗争や州政府と連邦政府との対立などもあって、実施に至らず廃棄されてしまった。

このモンテイロ＝大平の計画はその巻き直しというべきものであったが、両者は全く資力がなく、さらに州政府と連邦政府との対立のために補助金がおりず、入植計画は立ち消えになってしまう。隈部らはその後も数年間奮闘を続けるが、結局、サント・アントニオ耕地は放棄されてしまった[75]。

1910年に軍艦「生駒」がリオデジャネイロに寄航した際には、大平は山県商会の山県勇三郎らとともに歓迎事務所に駆けつけている[76]。

ブラジル日本人移民の草分けの一人であり、大平父子とも面識のあった鈴木貞次郎（南樹、1879-1970）によれば、大平三次は他にも「一億万円の資金でグワナバラ湾［リオデジャネイロ市の東側にある湾］埋立案を立てる」[77]ことなどがあったという。鈴木は、ブラジルでの大平三次について、「子息の善太郎などゝ違って天下国家を話す気概があり、万更利益一点よりする商人ではなかった」が、「こう云う三次の性格が商店経営に成功する訳がない」[78]と述べている。結局、大平は「日本に引上る旅費さえないという窮地に立たされ」、「漸く佐久間重吉がコンラード・ニーマイヤと共同で日伯商会の経営を譲り受けることゝなり、その金で漸く日本へ戻ることが出来た」[79]という。大平の帰国の時期については不明であるが、1911年7月にはまだサント・アントニオ耕地にいたことが判明している[80]ので、それ以後ということになる。

4.　中ノ鳥島探検隊

1913年10月28日付新聞各紙は、大阪市北区曽根崎町の鑛山業者・平尾幸太郎が「中ノ鳥島」別名「ガンジス島」の鉱区試掘権を農商務省より得たこと、その探検のため、近くスクーナー型帆船「吉岡丸」を派遣すること、等を報じている[81]。冒頭で述べたように、大平三次はこの船に「監督」として乗り込んでいた。吉岡丸は11月15日に海軍の元水路部長・肝付兼行（1853-1922）や地理学者の志賀重昂（しげたか）（1863-1927）らに見送られつつ東京を出航した[82]。途中で暴雨風に遭いつつも11月23日に父島に入港[83]、中ノ鳥島が存在するは

ずの海域へと向かった。ところが、27日間にわたる捜索活動にもかかわらず、島は全く発見されず、吉岡丸は空しく東京に引き返すことになった[84]。

ブラジルでの活動から、中ノ鳥島探検隊に参加するまでの経緯もまたはっきりしない。ただし、平尾幸太郎とともに探検隊の協同発起人となっていた松井淳平[85]は、水野龍の皇国殖民合資会社の業務執行社員だった人物[86]であり、この探検隊にはブラジル移民関係の人脈が関わっていたものと考えられる。また、ジャーナリストの横山源之助（1871-1915）は、この探検隊に関する記事を雑誌に大きく書きたてている[87]が、彼もまた『南米ブラジル案内』（1913年）他でブラジル移民を奨励しており、大平のサント・アントニオ耕地開拓計画について紹介したこともある[88]。

大平三次のその後については、いまのところ史料を見いだせていない。1934年以前に死去したことがわかる程度である[89]。また、大平善太郎はその後、大阪商船のブラジル航路事務長をつとめたという[90]。

おわりに

本稿の副題を「自由民権活動家から投機的実業家へ」としたが、若干の語弊はあるかもしれない。民権結社の社員であったのだから活動家であったことは間違いないが、新聞・雑誌の発行に関わっていたとはいえ、どの程度の活動なのかははっきりしない。「実業家」に「投機的」を付したのは、手がけた多彩な事業が、当時としてはいずれも先進的・野心的なものであった上、宮川運河を除いて、そのほとんどが失敗に終わっているからでもある。

明治期の南洋探険に関与した人物には、風変りな経歴の持ち主が少なくない。そもそも、「南洋探険」という行動自体が、資源収奪による一攫千金を狙って有無さえも知れない島を探して回る、という山師的な代物なので、一癖も二癖もある野心家ばかりが集まってくるのは、ある意味では当然のことかもしれない。とはいえ、大平のような多彩な経歴の持ち主はさすがに珍しい。

もっとも、その手がけた事業がことごとく失敗に終わっている上、あまりに広範にわたりすぎていて、随所随所で人々の記憶には残っているものの、全体としての人物像は極めてつかみにくい。そうしたことが、彼の名を今日まで埋もれさせてしまうことになった原因であろう。

ただし、最初に述べたように、本稿はあくまで不十分な調査に基づく中間報告にすぎない。今後の史料発掘による人物像の構築が望まれる。

（注）

1　本稿は、拙稿「大平三次小伝」（『近代における日本人の南方関与と領土認識』〔2011～2012年度科学研究費（若手研究（B））研究成果報告書〕2013年3月、所収）をもとに、訂正・加筆したものである。

2　中ノ鳥島の「発見」、および吉岡丸による探検航海の顛末については、拙著「幻の日本領・中ノ鳥島をめぐるミステリー――その“発見”から“消滅”まで」『中央公論』第119年第10号（中央公論新社、2004年10月）、および拙著『地図から消えた島々――幻の日本領と南洋探検家たち』〔歴史文化ライブ

ラリー〕（吉川弘文館、2011年）を参照。
3『大阪朝日新聞』1913年10月29日付「中鳥島探検隊」。
4『時事新報』1913年11月15日付「無人嶋の探検」。他に、同16日付「五億円の宝庫」、『やまと新聞』11月16日付「無人島探検船出帆」が67歳と報じている。なお、『国民新聞』1913年11月16日付「南へ南へ我宝島へ」は、大平を「元陸軍大佐」としている。しかし、軍籍にあった事実は確認できないし、後述するような本人の経歴からしても、そのような事実は考えにくい。
5『報知新聞』1913年12月29日付「吉岡丸危難を父島に避く」、『中外商業新報』1914年4月3日付「中之鳥島の探撿」など。
6　中村英彦〔編〕『度会人物誌』（渡会郷友会、1934年）列伝34頁［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1907249/32］に、出生地は「長野県飯田町」とある。また、1905年に飯田中学の学生が編纂した『伊那地方其の他各地の人物及古伝説』と題する文集に、飯田町出身者として大平三次を取り上げた項目があるという（今村良太「明治の中学生文集」『伊那』第20巻第7号、1972年7月）。
7　三谷敏一〔編〕『神都名家集』（三谷敏一、1901年）87-89頁「大平参次氏之伝」［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778153/47］。ただし、同書は編者自身が「誤字誤植等甚ダ少シトモセズ」（凡例）と認めているように誤植が多く、注意が必要である。
8　『飯田尋常高等小学校沿革紀要』（1908年）に掲載された岩崎の門人一覧が、市村成人『伊那尊王思想史』（国書刊行会、1973年。初刊1929年）172-173頁、村澤武夫「尊皇の士岩崎長世」『信濃』第2次第25号（信濃史学会、1944年3月）91-92頁に転載されており、「大平参次」が岩崎門下であることが確認できる。
9　市村『伊那尊王思想史』170-178頁。なお、三谷〔編〕『神都名家集』87頁には「十有余歳単身飄々故山を辞し東西を遍歴して東都に入り岩崎長世翁の門に入りて学を修む」とあるが、岩崎は文久3年に飯田を去った後は京都に移り、のちに大坂難波神社の宮司となっているので、「東都」すなわち江戸で学んだとするのは誤りであろう。
10　三谷〔編〕『神都名家集』87頁。ルビは引用者による。以下同じ。
11　三谷〔編〕『神都名家集』87頁。
12　板垣退助〔監修〕／遠山茂樹＋佐藤誠朗〔校訂〕『自由党史　上』〔岩波文庫〕（岩波書店、1957年）第2編第1章、87頁。
13『自由党史　上』第3編第2章、174頁。
14　野口孝一『銀座煉瓦街と首都民権』（悠思社、1992年）8頁。同書には、幸福安全社の設立時期と所在地についての詳しい考察があるが、大平については触れられていない。
15　三谷〔編〕『神都名家集』87頁。宮武外骨＋西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』（みすず書房、1985年）33頁によれば、少なくとも1878年9月10日から1890年5月まで印刷長として署名している。
16　国立国会図書館「新聞紙名変遷情報」［http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-534.php］による。
17　山田享次〔編〕／岸田吟香〔閲〕『米国前大統領哥蘭的公伝』（学農社、1879年）［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/782289/26］。
18　岡野他家夫「沼間守一」（『三代言論人集　第三巻』時事通信社、1962年、所収）219頁。
19　宮武外骨『明治演説史』（有限社、1926年）59頁［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/980828/36］。
20　宮武＋西田『明治新聞雑誌関係者略伝』33頁。
21「在京信州人士松沢上条の激励会を開く」『松本新聞』1880年6月17日（有賀義人＋千原勝美〔編〕『長野県自由民権運動奨匡社資料集』信州大学教育学部松本分校奨匡社研究会、1963年、所収）84頁。『東京曙新聞』1880年6月12日付からの転載。
22　山下重一「土居光華と『東海暁鐘新聞』」『國學院大學図書館紀要』第3号（國學院大學図書館、1991年3月）［http://ci.nii.ac.jp/naid/110005943563/］93頁。結婚の時期は不明。曽我部一紅は「土居光華氏の妹婿大平参次氏」と書いている（曽我部「黒岩先生と余」涙香会〔編〕『黒岩涙香』扶桑社、1922年、775頁）が、誤りと思われる。
23「明治十三年八月　町村別奨匡社社員名簿」長野県〔編〕『長野県史　近代史料編　第三巻（一）政治・行政　民権・選挙』（長野県史刊行会、1983年）300頁。
24　中島博昭『鋤鍬の民権――松沢求策の生涯』（銀河書房、1974年）234-252頁、同「松沢求策と八丈島の近代化」『信濃』第3次第43巻第5号（信濃史学会、1991年5月）。
25　この時期に発行された「キンドル散」の引札には、「伝方　東京銀座　薬善堂　岸田吟香」「本舗　東京銀座　東京新聞社　大平三次」とある（内川芳美〔編〕『電通創立75周年記念出版　日本広告発達史上』電通、1976年、51頁、および山本武利『広告の社会史』法政大学出版局、1984年、17頁に掲載）。
26『読売新聞』1880年11月19日付3面。守川周重の筆による広告『茶臼山凱歌陣立』芝居絵を使った広告が知られている（「「小児薬王キンドル散」広告」早稲田大学古典籍総合データベース

[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko10/bunko10_08098/])。
27『読売新聞』1880年11月19日付3面。
28　亭々生「目睹耳聞録」『薬局』第7巻第8号（南山堂、1956年8月）68頁。
29『読売新聞』1882年11月15日付3面に「一昨日」、『日の出新聞』同日付（新聞集成明治編年史編纂会〔編〕『新聞集成明治編年史』第5巻、林泉社、1936年、176頁、所収）
[http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920354/117] に「昨日」とある。
30　痴遊生「獄中生活」『痴遊雑誌』第1巻第3号（話術倶楽部、1935年7月）35頁。
31　田岡嶺雲『明治叛臣伝』（西田勝〔編〕『田岡嶺雲全集　第五巻』法政大学出版局、1969年、所収）、日比野元彦「民権運動から南洋探検へ――川澄徳次の場合」『信州白樺』第44・45・46合併号（信州白樺、1981年10月）。
32『海底二万里』の翻訳としては、井上勤訳（『六万英里 海底紀行』1884年）に次ぐ2つ目のものである。
33　ジュールス、ベルン／大平三次〔重訳〕『五大洲中 海底旅行　上編』
序・3頁［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/896747/5］。
34　国立国会図書館「新聞紙名変遷情報」によれば、この新聞の変遷は以下の通りである。1878年12月19日『安都満新聞』→1879年月12月4日『いろは新聞』→1884年11月3日『勉強新聞』→1885年4月25日『世論日報』→1885年8月25日『日本たいむす』→1885年12月終刊。
35　曽我部「黒岩先生と余」771-796頁。
36　曽我部「黒岩先生と余」776頁。
37『官報』1885年5月23日付［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2943774/1］、宮武外骨『明治奇聞第二篇』（半狂堂、1925年）18頁［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/932244/13］。外骨は『輿論日報』を「破廉恥日報」とこきおろしている。
38　三好徹による黒岩涙香の伝記小説『まむしの周六』には、大平はもともと「新聞人ではな」く、単に「金儲けが主たる目的」で『日本たいむす』を発行したとされているが、これは事実ではない（三好徹『まむしの周六――萬朝報物語』〔中公文庫〕中央公論社、1979年、37頁。同作は『中央公論 歴史と人物』に1975年1月から1976年12月まで連載され、1977年に単行本として刊行された）。
39　光永眞三〔編〕『広告宝典 成功之恩師』（隆文館、1905年）30頁
[http://dl.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/803306]。ただし、同書では「明治十七八年頃、東京に於て」発行されていた「タイムス」と題する新聞紙」の「事務員大平某」の発案、とされている。時期と紙名は合致するが、これが大平三次のことかどうかは確定できていない。
40「新聞等解停々止ノ件其四」（《公文録》明治18年・第38巻・明治18年10月・内務省第2、国立公文書館 本館-2A-010-00・公03933100）、「日本タイムス新聞解停ノ件」（同・第40巻・明治18年11月・内務省第2、国立公文書館 本館-2A-010-00・公03935100）。伊藤秀雄『黒岩涙香――探偵小説の元祖』（三一書房、1988年）46頁。
41　伊藤『黒岩涙香』46頁。
42　三谷〔編〕『神都名家集』87頁。
43　この興行については石井研堂『改訂増補 明治事物起源』（1944年、明治文化研究会〔編〕『明治文化全集　別巻』日本評論社、1969年）1230-1231頁、および小島貞二小島『ザ・格闘技――最強をめざす男たちの世界』（朝日ソノラマ、1976年）82-95頁、同『力道山以前の力道山たち――日本プロレス秘話』（三一書房、1983年）43-64頁を参照。ただし、小島は興行主である大平の名を挙げていない。なお、この興行に関連して、大平を「新門辰五郎の子分だったと伝えられる」と述べている記事がある（海棠智美「日本格闘三国志　猛打！拳闘創世記《第1回》」『ゴング格闘技』第21巻第1号、日本スポーツ出版社、1988年1月、82頁）が、裏付けがとれない。
44 “**Sparer**: One who spars or boxes.” *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., Vol. XVI, Oxford: Clarendon Press, 1989, p. 124. 同辞典は1814年から1886年にかけての用例を4つ挙げている。
45『読売新聞』1887年5月5日付「外国人の相撲」。
46　石井研堂『改訂増補 明治事物起源』1230頁。ただし、同書に「初日も見ずして、興行中止となり」とあるのは誤りで、実際に興行が始まっていたことは新聞報道から明らかである。
47　山本笑月『明治世相百話』〔中公文庫〕（中央公論新社、2005年。初版1936年）188頁。
48　随感随筆生「明治丁亥年中狂詞」『団々珍聞』第630号（1889年1月7日）10271頁。
49　三谷〔編〕『神都名家集』88頁、石井『明治事物起源』1230頁。
50　小島『力道山以前の力道山たち』61-64頁。
51「すぱあらの章」から「一空の章」まで。富田常雄『姿三四郎　天の巻』、同『姿三四郎　地の巻』〔文庫コレクション大衆文学館〕（講談社、1996年）所収。
52 山下「土居光華と『東海暁鐘新聞』」91頁。
53 三谷〔編〕『神都名家集』88頁、中村〔編〕『度会人物誌』事蹟58-59頁、第九回関西府県聯合共進会三重県協賛会『三重県事業史』（第九回関西府県聯合共進会三重県協賛会、1907年）113頁

［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/765948/78］。
54 三谷〔編〕『神都名家集』88頁。
55 天竺浪人（川口瀧造）『勢伊志紀 顔見立評判記』（川口瀧造、1895年。［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778180］）46頁、中村〔編〕『度会人物誌』事蹟59頁、三重県協賛会『三重県事業史』113頁、伊勢市〔編〕『伊勢市史　第四巻　近代編』（伊勢市、2012年）414頁。
56『伊勢市史　第四巻』414頁。三谷〔編〕『神都名家集』88頁では1888年着工とする。
57 宮川村史編さん委員会〔編〕『宮川村史』（宮川村、1994年）762頁。同書437-438頁も参照。
58『伊勢市史　第四巻』414-415頁。
59『伊勢市史　第四巻』711頁。
60『勢伊志紀 顔見立評判記』46-47頁。
61 三谷〔編〕『神都名家集』87頁。
62『宮川村史』437頁に、大平が1911年7月にブラジルのサント・アントニオ耕地（後述）から、大平が「宮川運河」の「主事」池田光武に送った書簡が紹介されている。それによれば、「宮川運河」は「茲ニ満期閉所スルコトヽナレリ」となる。また、この手紙から、大平の自署が「大平三次」であることが確認できる。
63　鈴木貞次郎『埋もれ行く拓人の足跡』（鈴木南樹、1969年。初版1941年）91頁。
64　池田重二『ブラジル日本移民（人国記）　上巻』（日伯文化出版社、1958年）52頁。
65　大平善太郎「南米伯剌西爾国貿易事情」『農商務省商工彙報』明治39年第1号（東京製本、1906年1月。松村敏〔監修〕『農商務省商工彙報　第2巻』ゆまに書房、2003年、所収）。なお、鈴木貞次郎は善太郎のブラジル到着を「明治三十八年の暮」としているが、本報告書提出のタイミングから見て、実際にはもう少し早かったものと思われる。
66　鈴木『埋もれ行く拓人の足跡』178-180頁、前山隆『風狂の記者――ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯』（御茶の水書房、2002年）161頁。
67　鈴木『埋もれ行く拓人の足跡』180-181頁。
68　山下「土居光華と『東海暁鐘新聞』」91頁。
69　外務省通商局〔編〕『復刻版　海外日本実業者の調査　第1巻　明治36年～大正元年』（不二出版、2006年）41頁。なお、大平の本籍地が「兵庫県」とあるが、翌年以後の版では「三重県」となっており、誤りと思われる。
70『海外日本実業者の調査　第1巻』111頁。
71『海外日本実業者の調査　第1巻』165頁。
72　大平善太郎「伯剌西爾国ニ於ケル本邦商品ノ状況」『農商務省商工彙報』明治41年第8号（東京製本、1908年6月。松村敏〔監修〕『農商務省商工彙報　第6巻』ゆまに書房、2003年、所収）。
73「「リオ、デ、ジャネイロ」州ニ日本人植民地設置ノ契約締結セラレタル件」外務省〔編〕『日本外交文書　第四十二巻第二冊』（日本国際連合協会、1961年）312-314頁、「「リオ、デ、ジャネイロ」州日本人植民地設置契約書送付ノ件」同『日本外交文書　第四十三巻第二冊』（日本国際連合協会、1962年）306-309頁。
74「リオ、デ、ジャネイロ」州ノ本邦人植民契約ニ関シ具報ノ件」『日本外交文書　第四十三巻第二冊』310-311頁。
75　野田良治「「リオ」州低地ノ開拓ト日本人」（『特輯第十四号』外務省調査部第四課、1939年9月。広瀬順晧〔編〕『近代外交回顧録　第4巻　伊丹松雄／野田良治／幣原喜重郎／永井松三／倉知鉄吉／出淵勝次／大井成元』〔近代未刊史料叢書 5〕ゆまに書房、2000年、所収）44-51頁。小笠原公衛が1983年に行った実地調査によれば、サント・アントニオ耕地跡は、コンセイソン・デ・マカブー郡（Conceição de Macabu）に移管されているという（小笠原『消えた移住地を求めて』サンパウロ人文科学研究所、2004年、168頁）。
76　志賀重昂『世界山水図説』（冨山房、1911年）133頁。
77　鈴木『埋もれ行く拓人の足跡』181頁。
78　鈴木『埋もれ行く拓人の足跡』181頁。
79　鈴木『埋もれ行く拓人の足跡』184頁。
80『宮川町史』437頁。
81『読売新聞』1913年10月28日付「新火山島へ探険」、『大阪朝日新聞』1913年10月29日付「中鳥島探検隊」等。
82『報知新聞』1913年11月16日付夕刊「壮なる哉吉岡丸」、『時事新報』1913年11月16日付「五億円の宝庫」等。
83『報知新聞』1913年12月29日付夕刊「吉岡丸危難を父島に避く」等。
84『時事新報』1914年4月2日付「幽霊島遂に発見されず」、『東京朝日新聞』1914年4月3日付「無人島探検船」等。

85『中外商業新報』1913年11月15日付「無人島の探検」、『読売新聞』同日付「無人島探検」。
86「皇国殖民合資会社ヨリ「ブラジル」行遺民募集認可願出ニ付照会ノ件」外務省〔編〕『日本外交文書　第四十一巻第二冊』（日本国際連合協会、1961年）381頁。
87　有磯逸郎「明治大正年間に於ける無人島探険史」『新公論』第29年第1号（新公論社、1914年1月号。『横山源之助全集　第7巻　植民（一）』法政大学出版局、2005年、所収）。「有磯逸郎」は横山の筆名。横山はガンジス島（中ノ鳥島）に早くから興味を抱いており、「無人島発見成功者水谷新六君の半生」（1910年）、「海国男児の壮図」（同年）などで再三にわたり取り上げている（『横山源之助全集　第8巻　植民（二）』法政大学出版局、2005年）。
88　横山「二千八百浬の海上より」『横山源之助全集　第7巻』141頁（初出1912年）。
89　1934年8月刊行の中村〔編〕『度会人物誌』事蹟59頁に故人であることが触れられているが、沒年月日に関する記事は無い。なお、同書にはブラジル渡航についての記述はない。
90　山下「土居光華と『東海暁鐘新聞』」91頁。